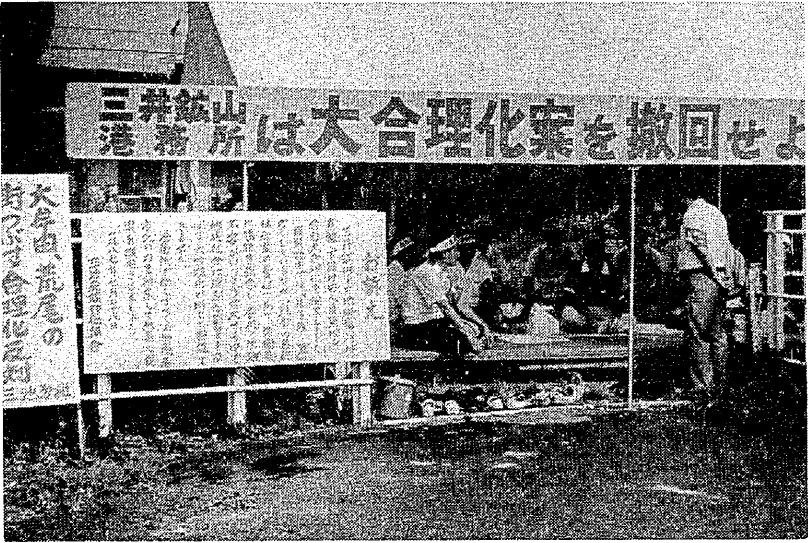


# 三井鉱山 三池港務所 は大合理化案を撤回せよ



炎天下、28日から4日間抗議の座り込みで抗議

七月十七日の会社提案以来、七分会(港務所・市成義弘分会長)では二回の全員集会を開いて、全員の意志統一をはかってきました。中央交渉を前にして「壁新聞」や職場新聞「みち潮」を発行し、港務所の全労働者に訴えました。つぎの記事は「みち潮」号外から。

## 労働者犠牲の大合理化に反対

合理化提案に当たって会社は、構造的な不況を大いに強調し、企業生き残り、策として「やむを得ない措置」だとしている。しかし、その犠牲を労働者におしつけ、もっとも安易な方策でこれを乗りきろうとしていることについて、われわれは反対である。それは大量の人減らしを必要とする大合理化で「もうけ」を維持し、自民党政府と独占資本が一体となった「産業構造調整政策」そのものであると考えるからだ。売上高の減少を強調するが、それは企業の責任であり経営努力こそ問われなければならないのである。断じてわれわれ労働者の責任ではない。

このさい、会社はさまざまな名目で蓄えてきた、いわゆる社内留保を減らしてでも、企業の社会的責任を果たすべきだ。合理化提案の一つである再雇用者の処遇については、一定の線引きをした全員解雇であり、本人の意思もなにもない首切りである。三井石炭でさえも希望退職には相応の条件をつけている。この点だけをもきわめてきびしい内容となっている。低賃金と人減らし合理化、職場の見直しや省力化の中で、汗水流して働く労働者に犠牲を強要し、いたずらに雇用不安をおおる会社には、断固反対する。

## みなさん大変でーす 合理化の中身は…

その一

### 再雇用者

再雇用者については九月と十二月に解雇するとしている。こんな人馬馬鹿にした話はない。もっともこの人たちは三年、四年と再雇用されることを条件に特別加給金、定年加給金の支給を受けていない。



# 1,300号

みなさんの声をもっと紙面に

## たたかいとともて40年

機関紙「みいけ」が今号で千三百号を迎えました。昭和二十一年二月の組合結成から十一年あとの十二月に「組合だより」がガリ版刷り(週間タブロイド二頁)で発行され、七十五号からは「みいけ」として活版の自家印刷となり型式、内容とも一新、その後大版の時期を経てタブロイド四頁で現在まで続いています。いま、月二回刊ですが百号出するのに四年以上の年月が必要で、〇〇闘争との関係で「守る会」会員にも有料で配布されていますが、組織人員減の中で発行を維持するのも大変です。みなさんの投稿やご意見をもとに、いっそう充実させ、たたかいの武器にしましょう。



その二

### 一時帰休

提案では基本給の八五〇が平均賃金の六〇〇になる。現在基準外が少ないので、基本給の八五〇がほとんどだ。この制度が来年六月まであるとすれば大変な損害だ。一時帰休は会社の都合で始まった。現しよう。

その三

### ベース・アップ

賃上げは来年一月からだろうです。苦しい生活の中で、わずかに楽しみにしていた差額もパー。協定は四月からなのに、こんなに簡単に変わるなんてびっくりではない。なんとかなさなや。みなさん、まだまだ大変な中身がいっぱいだ。私たちの要求を現しよう。

## 期末手当の推移

年	期	金額	石炭	港務
57年	上期	500,000	440,000	
	下期	500,000	石炭 443,000	港務 440,000
58年	上期	500,000	石炭 442,000	港務 440,000
	下期	500,000	石炭 442,000	港務 440,000
59年	上期	500,000	石炭 443,500	港務 442,000
	下期	500,000	石炭 444,500	港務 455,000
60年	上期	500,000	石炭 444,500	港務 461,000
	下期	1,100,000 (年)	石炭 444,500	港務 467,000
61年	上期	1,100,000 (年)	石炭 335,000	港務 463,000
	下期	550,000	石炭 270,000	港務 381,500
62年	上期	550,000	石炭 255,000	港務 317,500
	下期	550,000		

※ 62年上期、石炭は15,000の貸付

## 八月、平和を伝える

平和は守られているのだろうか。反核・平和運動がさまざまな形で広島、長崎の日を前に広がっていますが、依然として八月は平和にとって大切な月です。平和を語りつづけるのか、文庫・新書版をさくってみましょう。

文庫・新書で読める広島・長崎の記録(ノンフィクション)を紹介しましょう。文庫では、長崎で被爆した詩人・福田須磨子の苦闘の半生記『われら生きてあり』(ちくま)が最近出ました。第九回田村俊子賞(一九六九年)受賞作

『われら生きてあり』(ちくま)が最近出ました。第九回田村俊子賞(一九六九年)受賞作

新書では、被爆ジャーナリストが自らつづった記録、大佐古一郎『広島昭和二十年』(中公新書)、渡辺千恵子さんが被爆体験とあゆみを記録した『長崎に生きる』、広島県被爆者の手記編集委員会『原爆ゆるすまじ』(以上、新日本新書)。

岩波新書には、神田三亀男編『原爆に天を奪われて』(広島農協)の証言、被爆者の人生を追跡した北島宏泰編『ひとりひとりの戦争・広島』。中高年向けの岩波ジュニア新書には、伊東社『一九四五八月六日』、長崎総合科学大学平和文化研究所編『ナガサキ一九四五八月九日』、松元寛『広島・長崎修学旅行案内』など。石川逸子『中学生の春夏秋冬』には広島修学旅行の記録があります。

## 「われら生きてあり」など

### 一文庫、新書で読める 広島・長崎の記録

品です。小倉豊文『最後の記録』(中公)は一九四八年に刊行された、人文学者の広島原爆体験記。藤波健彰『ニュースカメラマン』(中公)はカメラマンの目で見えた広島原爆の惨状。高木俊朗『新版・焼身』(角川)は長崎の女生徒たちの被爆記録。袖井林二郎『私たちは敵だっただのか』(角川)は在米被爆者たちの苦しみレポート。(定価は三百円～六百円台)